

参加記

第 153 回北海道診療情報管理研究会学術集会 2018 年 12 月 15 日 (土)



◆第一部 小講演 (13:35~14:10)

講演: 「死亡診断書の精度向上と均てん化」

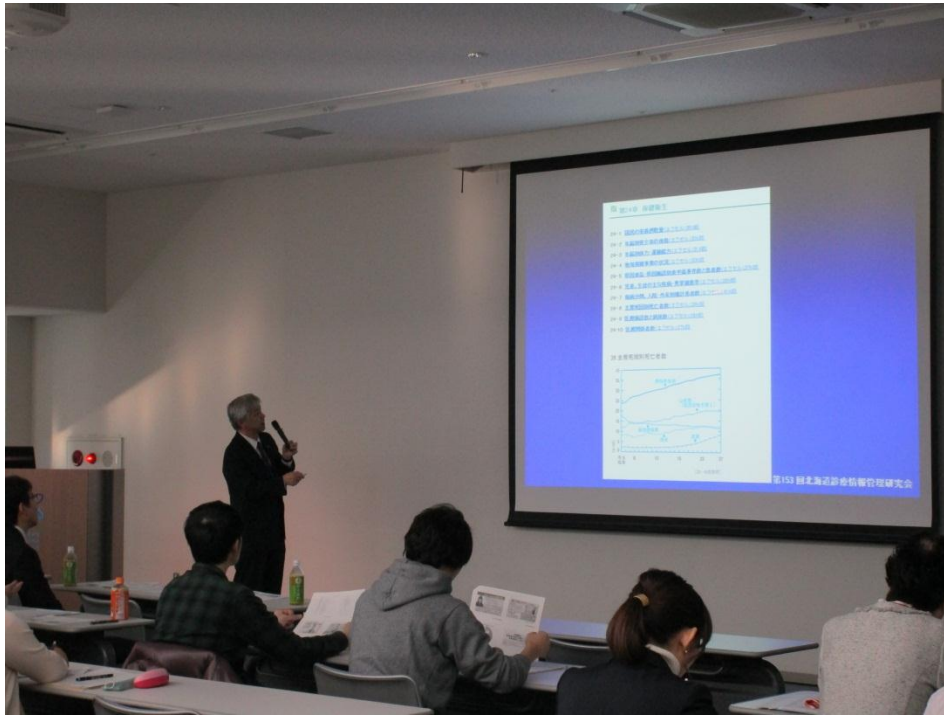
講師: 北海道診療情報管理研究会 理事長 中村 博彦 先生

死亡診断書(死体検案書)は、人の死亡を医学的・法的に証明するものであると同時に、我が国の死因統計作成の資料になるものとして重要な意義を持ちます。

しかしながら短時間での記載や、時として主治医以外の医師が記載すること、医師の死亡診断書の書き方について関心の低さからその精度向上は重要な課題であるとお話がありました。

特に「原死因の選択ルール」の医師への周知も十分でない事も大きな要因となっており、例えば日本で死因として多い肺炎については、その殆どが何らかの原因疾患による誤嚥性肺炎言われているが、現実には非誤嚥性の肺炎で死亡診断書が作成されている現状があると話されました。

死因統計の目的は、人口動態調査の一部として、国民の死亡原因を分析し、疾病の予防や改善を図る事を目的としていて、WHO憲章の中でも定義付けと国際統一した諸統計を作成する勧告しています。



急性期病院の在院日数短縮と地域包括ケアシステムの進展により、死亡場所が急性期を担う病院ではなく緩和や療養病床、在宅・施設等での死亡が増加することや、ACPが推奨されることで、地域のかかりつけ医が死亡診断書や死体検案書に関わる機会が増え、その適切な記載方法を、地域包括ケアシステムに関わる医師等に広く周知しつつ、如何にして急性期病院以外での死亡診断書や死体検案書の質を担保していくのが重要になる、と次のステージを見据えた死亡診断書のあり方や重要性について認識させられました。

そのためには死因統計は国の保健衛生上での最重要統計であると認識し、基礎となる死亡診断書を適切に記載するよう指導することが診療情報管理に求められる最優先課題であることと、そのためには診療情報管理士の役割がカギであることを話されました。大変重要かつ参考になる講演であり、これから取り組むべき課題の一つが明確になった有意義な内容でした。

◆第二部 学生による発表（14：10～15：00）

将来、診療情報管理士として活躍する学生より演題発表がありました。

1. 演題名：日本のコンピュータ断層撮影装置（CT）の地域差と活用状況

演 者：北海道情報大学 江崎 優作



（内容）

日本は世界的に見てもCTの保有台数が最も多いことから、政府の人口推計、医療施設調査のデータ、情報・特定検診等情報データベースなどを用い、CT保有大国としての我が国における都道府県別の算定回数、医師数、CT装置台数からCTの地域差、活用状況の調査及び考察が報告された。

2. 演題名：HIMと診断書の関わり方について

演 者：札幌医療秘書福祉専門学校 瀬尾 勇星、中村 萌



(内容)

高齢化社会がもたらす課題の一つとして「医療の質の向上」があげられ、日本診療情報管理学会作成の『診療情報管理士業務指針』なかでも「医療の質の向上」への関与・支援が述べられている。診療情報管理士の関与により死因統計の基となる死亡診断書の精度向上が見込めると考え、医療機関へのアンケート調査を通して、精度向上に向けての診療情報管理士の関わり方についての考察が報告された。

3. 演題名：現場が求めるこれからの診療情報管理士

演 者：札幌医療秘書福祉専門学校 大木 由香里、石田 唯、丸茂 寛子



(内容)

診療情報管理士（HIM）を目指すに当たり、HIMとして実際の現場で求められる人材や必要とされる知識やスキルを知り、今後のHIMの教育や育成を更に充実させるために学生のうちからどのように取り組むべきかを医療機関へのアンケート調査を通して、今後のHIMの育成・カリキュラム等についての考察が報告された。

4. 演題名：災害時に対応できる診療情報管理士を増やすために

演 者：札幌医療秘書福祉専門学校 阿部 優也、福原 茉依、南部 藍



(内容)

2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震、2018年の西日本豪雨・北海道胆振東部地震等、近年増加する災害に対し、診療情報管理士としてどのような役割があり、実際にどのような関与があるのか、医療機関に対するアンケート調査を通し、その結果に対して災害時に診療情報管理士のあり方について考察が報告された。

◆第三部 診療情報管理士による発表（15：15～16：15）

医療機関に勤務されている現役の診療情報管理士より演題発表がありました。

5. 演題名：入院患者の副傷病名付与の現状把握－抗生剤について－

演 者：砂川市立病院 広庭 歩佳



(内容)

抗生剤が使用されている患者に対して、適切な病名付与は時にDPCコードに影響し、とりもなおさず医療費にも影響を及ぼす。

とりわけ抗生剤を使用している患者のDPC副傷病の見落としに対して、病名付与の現状を調査と適切な病名付与に伴う、適切なDPCコードを付与するため取り組みについての報告がされた。

6.演題名：オーダー・レポート情報を利用した量的点検システムの構築

演 者：王子総合病院 北側 亜弥



(内容)

量的点検として行っている、入院カルテを対象とした同意書等の取得の有無や取得用紙の不備の確認について、利用する情報として電子カルテ上でオーダー情報その実施情報に加え、散在する部門システムの情報も抽出して1つのシステムに集約することで量的点検を効率的に行えるシステムを構築し、その取り組みが報告された。

7. 演題名：電子パスの現状と課題について

演 者：北海道がんセンター 盛永 剛



(内容)

2008年11月より電子カルテシステムが導入され、以降同システム上での電子パスの運用を開始し、医療情報管理室が中心となり、問題点の収集やその問題解決に向けた運用の提案などを行ってきている。電子パスに関する勉強会や操作説明会を行い、管理コードの統一化、パス適用件数の報告等の活動を通して、問題点の洗い出しや更なる改善、電子パス情報を用いた質改善への現状が報告された。

8. 演題名：電子カルテの利用者情報を用いた情報の二次利用に関する取り組み

演 者：名寄市立総合病院 昆 貴行



(内容)

2011年3月より電子カルテシステムを稼働し、さまざまな業務改善等を行なってきた。電子カルテの患者情報を二次利用する利活用とは別に、利用者に関連する情報を活用する取り組みとして、職員マスタや所属マスタ等を利用するなど、利用者情報を二次的に活用したツールを用い、院内研修管理システムと勤怠管理システム構築した運用事例が報告された。

◆ 学術集会に参加して感じたこと

死亡診断書の精度管理については、当院では正直手付かずの取り組みであり、現状としては作成された死亡診断書に則って死亡統計を作成するに留まっています。国の死因統計の作成の重要な資料となるものでもあることから、診療情報管理士の業務の一環として精度管理の必要性について考えさせられました。改めて院内で医師への記載ルールを周知することを含め、これから取り組みを検討したいと考えています。

学生による診療情報管理士の業務に関する発表では、色々な視点で診療情報管理士の役割や将来の方向性について考えていることや、現場からのアンケート調査を駆使してのアクティブな取り組みや活動を行っている事は評価に値すると思います。私自身気付きもあり、大変参考になりました。



また現役の診療情報管理士の発表においては、やはりデータベースソフトを活用して電子カルテ情報を二次利用する取り組みに関する内容が多くありました。

当院でも着手していることや未着手の部分もあり、今後の情報の共有化や業務の効率化を進める上で、大変参考となりました。

今後は当該学術集会での当院から何らかの取り組みも発表することも検討し、他からの評価も得て改善や更なる効率化、診療情報の利活用を進め、医療の質の向上に資する活動をしていきたいと考えています。

自院に当てはめて見ると他院の取り組みや活動は明らかに先を行っていると感じたこと、改めて気づきや必要性を認識するなど、全体的にボリュームもありつつも大変有意義な内容でした。

以上

2019年2月4日

函館五稜郭病院 診療情報管理課

坂本 勝